


DRESDNER PHILHARMONIE

2000 JAPAN TOUR



 DRESDNER
PHILHARMONIE



DRESDNER PHILHARMONIE

2000 JAPAN TOUR

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

2000年日本公演

DRESDNER
PHILHARMONIE
2000 JAPAN TOUR

Schedule

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団 2000年日本公演スケジュール

京都
Kyoto

6.17 (土) 7:00pm

京都コンサートホール 大ホール

◎主催：京都市、財団法人京都市音楽芸術振興財団、朝日新聞社、朝日放送

Program C

大阪
Osaka

6.18 (日) 3:00pm

ヒガシマル・セレクテッド・コンサート
ザ・シンフォニーホール

◎主催：朝日新聞社、朝日放送 ◎協賛：ヒガシマル醤油

Program A

武生
Takefu

6.19 (月) 7:30pm

武生市文化センター

◎主催：武生国際音楽祭推進会議、(財)武生市文化振興・施設管理事業団

特別

吹田
Suita

6.21 (水) 3:00pm

金蘭短期大学佐藤記念講堂

◎主催：金蘭短期大学

Program E

松山
Matsuyama

6.22 (木) 7:00pm

愛媛県県民文化会館 メインホール

◎主催：愛媛朝日テレビ、朝日新聞社 ◎後援：愛媛県、愛媛県教育委員会、松山市、松山市教育委員会

Program D

広島
Hiroshima

6.23 (金) 6:45pm

広島厚生年金会館

◎主催：広島ホームテレビ、朝日新聞社

Program A

福岡
Fukuoka

6.24 (土) 6:00pm

メニコン スーパーコンサート 2000

アクロス福岡

◎主催：九州朝日放送、朝日新聞社 ◎特別協賛：株式会社メニコン

Program D



名古屋
Nagoya

6.25 (日) 1:30pm

愛知県芸術劇場コンサートホール

◎主催：名古屋テレビ放送、朝日新聞社

Program A

静岡
Shizuoka

6.27 (火) 6:30pm

静岡市民文化会館 大ホール

◎主催：静岡朝日テレビ、朝日新聞社

◎後援：静岡市、静岡市教育委員会、(財)静岡県文化財団

Program D

相模原
Sagamihara

6.28 (水) 6:30pm

グリーンホール相模大野

◎主催：(財)相模原市民文化財団 ◎後援：朝日新聞社 ◎協力：小田急電鉄

Program D

姫路
Himeji

6.29 (木) 7:00pm

姫路市文化センター 大ホール

◎主催：(財)姫路市文化振興財団 ◎共催：姫路市、姫路市教育委員会

Program E

東京
Tokyo

6.30 (金) 7:00pm

東京オペラシティコンサートホール

◎主催：朝日新聞社、テレビ朝日

Program C

東京
Tokyo

7.1 (土) 2:00pm

サントリーホール

◎主催：朝日新聞社、テレビ朝日

Program D

横浜
Yokohama

7.2 (日) 2:00pm

横浜みなとみらいホール

◎主催：朝日新聞社、テレビ朝日

Program E

Program

A

ベートーヴェン：交響曲 第6番 ヘ長調 op.68「田園」

ブラームス：交響曲 第1番 ハ短調 op.68

B

ウェーバー：歌劇「オベロン」序曲

シューベルト：交響曲 第7番(8番)ロ短調 D.759「未完成」

ベートーヴェン：交響曲 第6番 ヘ長調 op.68「田園」

C

ウェーバー：歌劇「オベロン」序曲

シューベルト：交響曲 第7番(8番)ロ短調 D.759「未完成」

ブラームス：交響曲 第1番 ハ短調 op.68

D

ベートーヴェン：交響曲 第6番 ヘ長調 op.68「田園」

ベートーヴェン：交響曲 第5番 ハ短調 op.67「運命」

E

ウェーバー：歌劇「オベロン」序曲

シューベルト：交響曲 第7番(8番)ロ短調 D.759「未完成」

ベートーヴェン：交響曲 第5番 ハ短調 op.67「運命」



ベートーヴェン：交響曲 第5番 ハ短調 op.67「運命」

Beethoven: Symphony No.5 in c minor op.67

- I アレグロ・コン・ブリオ
Allegro con brio
- II アンダンテ・コン・モト
Andante con moto
- III アレグロ、スケルツォ
Allegro, scherzo
- IV アレグロ
Allegro

ベートーヴェン：交響曲 第6番 ヘ長調 op.68「田園」

Beethoven: Symphony No.6 in F major op.68 "Pastorale"

- I アレグロ・マ・ノン・トロッポ「田園に着いた時の愉快的な気分を目覚め」
Allegro ma non troppo
- II アンダンテ・モルト・モッソ「小川のほとりの情景」
Andante molto mosso
- III アレグロ、スケルツォ「田舎の人々の楽しい集い」
Allegro scherzo
- IV アレグロ「雷雨、嵐」
Allegro
- V アレグレット「牧歌、嵐のあとの喜びと感謝」
Allegretto

ブラームス：交響曲 第1番 ハ短調 op.68

Brahms: Symphony No.1 in c minor op.68

- I ウン・ポーコ・ソステヌート、アレグロ
Un poco sostenuto, Allegro
- II アンダンテ・ソステヌート
Andante sostenuto
- III ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ
Un poco allegretto e grazioso
- IV アダージョ、ピウ・アンダンテ、アレグロ・ノン・トロッポ、マ・コン・ブリオ
Adagio, Piu andante, Allegro non troppo ma con brio

シューベルト：交響曲 第7番(8番)ロ短調 D.759「未完成」

Schubert: Symphony No.7 (8) in b minor D.759 "Unfinished"

- I アレグロ・モデラート
Allegro moderato
- II アンダンテ・コン・モト
Andante con moto

ウェーバー：歌劇「オベロン」序曲

Weber: "Oberon" Overture



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



ワルター・ウェラー [指揮]

Walter Weller, Conductor

1939年、ウィーン生まれ。6歳から音楽を学び、ウィーン音楽院でヴァイオリンを学ぶ。

1956年、弱冠17歳でウィーン・フィルのメンバーとなり、さらに21歳でコンサート・マスターに就任する。1958年に、ウェラー弦楽四重奏団を結成。この弦楽四重奏団は国際的な音楽祭やレコーディングなど幅広い活動を行う。当時の数多くの録音は今でも名盤としてCD化されファンの間で愛好されている。

同じくウィーン出身の名指揮者ヨーゼフ・クリップスの下で指揮を学び、1966年指揮者としてデビュー。

以降、ヨーロッパ各地で活躍。ウィーン・トーンクンストラ管弦楽団やロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・スコティッシュ管弦楽団、そしてロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団などの首席指揮者を歴任。

スコットランドでは50ポンド紙幣にウェラーのイメージが印刷されるという名誉を受けている。

ドイツ・オーストリア系の指揮者として現在最も幅広く活躍している巨匠の一人である。

Profile



ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

Dresdner Philharmonie

1870年に創立され、既に130年の歴史を誇るドイツの名門オーケストラ。

1871年のペテルスブルグ客演をはじめ、ヨーロッパ各国、1909年のアメリカ客演など早くから国外公演を積極的に行ってきた。また1888年に、チャイコフスキーが自らの指揮で交響曲第4番を、そして89年にはドヴォルザークが交響曲第5番を演奏したのを始め、ブラームス、ハンス・フォン・ビューロー、R.シュトラウス、ラフマニノフなどとも共演している。

第二次世界大戦のため一時解散を余儀なくされたが戦後再編成された。クルト・マズア、ギュンター・ヘルビヒらが音楽監督に就任し安定した実力を誇るようになった。ヘルベルト・ケーゲルの時代には多くの録音を残し高い評価を得た。ドイツ民主化後はイヨルグ・ペーター・ヴァイグレ、そして1994年にはミッシェル・プラソンを首席指揮者に迎えている。

ドイツらしい味わいの中に、ドレスデン独特の柔らかい響きと、同じドレスデンのシュターツカペレとは異なる新鮮さと現代感覚を兼ね備えた演奏は、世界中で高い評価を得ている。

DRESDNER PHILHARMONIE

■任命首席指揮者並びに芸術監督(2001年)

マレク・ヤノフスキ

■第一客演指揮者

ユーリー・テミルカーノフ

■名誉指揮者

Prof.クルト・マズア

■総裁

Dr.オリヴィエ・フォン・ヴィンターシュタイン

■指揮

ワルター・ウェラー

■第一バイオリン

ハイケ・ヤーニツケ

ヴォルフガング・ヘントリヒ

ゲルハルト・ベーター・ティーレマン

ジークフリート・ラウシュハルト

クリストフ・リンデマン

ユルゲン・ノーラウ

フォルカー・カルブ

ゲルハルト・バイエル

ハイデ・シュヴァルツバッハ

アンティエ・プロイニング

マルクス・ゴットバルト

ヨハネス・グロート

アネグレート・ディル

ユリアーネ・ヘインツェ

ダリア・シュマーレンベルク

アレクサンダー・タイヒマン

■第二バイオリン

ハイコ・ザイフェルト

クラウス・フリッチェ

ギュンター・ナウマン

エグベルト・シュトイアー

エリク・コルネク

ラインハルト・ローマン

ヴィオラ・マルツィン

シュテッフェン・ガイツチュ

Dr. マティアス・ベッティン

アンドレアス・ヘーネ

イェルン・ヘットフライシュ

スザンネ・クナッペ

ルート・ベトロヴィッチ

ドリト・シュヴァルツ

■ビオラ

クリスティーナ・ピワンク

トルステン・フランク

シュテッフェン・ザイフェルト

ゲルノート・ツェラー

ロター・フィービガー

ヴォルフガング・ハウボルト

ホルガー・ナウマン

ハイコ・ミュルベ

ハンス=ブルクハルト・ヘンシュケ

アンドレアス・クールマン

リュディガー・ギュルデンリング

アンドレア・ママート

■チェロ

マティアス・プロイティガム

ウルフ・ブレール

ヴィクトール・マイスター

ベトラ・ヴィルマン

トーマス・ベズ

フリーダー・ゲルステンベルク

ヴォルフガング・ブロンベルガー

カール=ベルンハルト・フォン・シュトゥンフ

クレメンス・クリーガー

ダニエル・ティーレ

■コントラバス

Prof. ベーター・クラウス

キリアン・フォルスター

ベルント・フレリヒ

ブリングフリード・ザイフェルト

ティロ・エルモルト

ドナテウス・ベルクマン

マティアス・ボーリヒ

オラフ・キンデル

■フルート

キリアン・ホフマン

ゲッツ・バンメス

ワルター・アウアー

クラウディア・シュミット

■オーボエ

ガイド・ティーツェ

イェンス・ブラッセ

ゲルト・シュナイダー

■クラリネット

Prof. ハンス=デトレフ・レヒナー

ファビアン・ディール

ディートマル・トレーベルヤール

クラウス・ヨッブ

■ファゴット

ミヒャエル・ラング

ハンス=ヨアヒム・マルクス

マリオ・ヘンデル

ヨアヒム・フシュケ

■ホルン

イェルグ・ブルックナー

ミヒャエル・シュナイダー

フォルカー・カウフマン

クラウス・コッペ

ヨハネス・マックス

ディートリヒ・シュレート

■トランペット

クリスティアン・ヘヒェリ

サバ・ケーレマン

ヴォルフガング・ゲエルロフ

■トロンボーン

ヨアヒム・フランケ

オラフ・クルンプファー

ラインハルト・カブヘングスト

ディトマル・ベスター

■ティンパニ/打楽器

アレクサンダー・ベーター

■楽団理事

マティアス・プロイティガム

クラウス・コッペ

■楽団インスペクター

マティアス・アルベルト

■楽団担当責任者

ヘリベルト・ルンゲ

ヘルムート・フリーメル

DRESDNER PHILHARMONIE

- **Chefdirigent :**
(Generalmusikdirektor)
Marek Janowski (ab 2001)
- **Erster Gastdirigent :**
Yuri Temirkanov
- **Ehrendirigent :**
Prof. Kurt Masur
- **Intendant :**
Dr. Olivier von Winterstein

- **Conductor :**
Walter Weller

- **1. Violinen**
Heike Janicke
Wolfgang Hentrich
Gerhard-Peter Thielemann (KV)
Siegfried Rauschhardt (KV)
Christoph Lindemann (KM)
Jürgen Nollau (KM)
Volker Karp (KV)
Gerald Bayer (KV)
Heide Schwarzbach (KV)
Antje Bräuning
Marcus Gottwald
Johannes Groth
Annegret Dill
Juliane Heinze
Dalia Schmalenberg
Alexander Teichmann

- **2. Violinen**
Heiko Seifert (KM)
Klaus Fritzsche (KV)
Günther Naumann (KM)
Egbert Steuer (KV)
Erik Kornek (KV)
Reinhardt Lohmann (KM)
Viola Marzin (KV)
Steffen Gaitzsch (KV)
Dr. Matthias Bettin
Andreas Hoene
Jörn Hettfleisch
Susanne Knappe
Ruth Petrovitsch
Dorit Schwarz

- **Bratschen**
Christina Biwank
Torsten Frank
Steffen Seifert (KM)
Gernot Zeller (KV)
Lothar Fiebiger (KM)
Wolfgang Haubold (KM)
Holger Naumann (KV)
Heiko Mürbe
Hans-Burkhart Henschke
Andreas Kuhlmann
Rüdiger Güldenring
Andrea Mamat

- **Violoncelli**
Matthias Bräutigam (KV)
Ulf Prella (KM)
Viktor Meister
Petra Willmann (KM)
Thomas Bätz (KV)
Frieder Gerstenberg (KV)
Wolfgang Bromberger (KV)
Karl-Bernhard von Stumpff
Clemens Krieger
Daniel Thiele

- **Kontrabässe**
Prof. Peter Krauss (KV)
Kilian Forster
Bernd Fröhlich (KV)
Bringfried Seifert
Tilo Ermold
Donatus Bergmann
Matthias Bohrig
Olaf Kindel

- **Flöten**
Karin Hofmann (KM)
Götz Bammes (KM)
Walter Auer
Claudia Schmidt

- **Oboen**
Guido Titze (KV)
Jens Prasse
Gerd Schneider (KV)

- **Klarinetten**
Prof. Hans-Detlev Löchner (KV)
Fabian Dirr
Dittmar Trebeljahr (KM)
Klaus Jopp (KM)

- **Fagotte**
Michael Lang (KV)
Hans-Joachim Marx (KV)
Mario Hendel (KM)
Joachim Huschke

- **Hörner**
Jörg Brückner
Michael Schneider
Volker Kaufmann (KV)
Klaus Koppe (KM)
Johannes Max
Dietrich Schlät

- **Trompeten**
Christian Höcheri
Csaba Kelemann
Wolfgang Gerloff

- **Posaunen**
Joachim Franke (KM)
Olaf Krumpfer (KM)
Reinhardt Kaphengst (KM)
Dietmar Pester

- **Pauken/Schlagzeug**
Alexander Peter

- **Orchestervorstand**
Matthias Bräutigam
Klaus Koppe

- **Orchesterinspektor**
Matthias Albert

- **Orchesterwarte**
Herybert Runge
Helmut Friemel

KM : Kammermusiker
KV : Kammervirtuos

エルベ河畔のフィレンツェ、 ドレスデンと創立130周年を迎える ドレスデン・フィル

文=岡本 稔 (音楽評論家)

text by Minoru Okamoto

ドレスデンはエルベ河の水路を利用した商業都市として古くから栄え、1216年に都市国家となり、16世紀以降はザクセン王国の首都に定められた。17世紀末に王位についた選帝侯フリードリヒ・アウグストのもとで次々とツヴィンガー宮殿をはじめ次々とバロック建築がたてられた。18世紀半ばにはかつてのドレスデン市街のランドマークだった聖母教会が完成、1792年には合唱団で名高いドレスデン聖十字堂教会が後期バロックの様式で建てられた。ゲーテは19歳の時にドレスデンに12日間滞在し、芸術の都が誇る数々の美術館を訪問するとともに、エルベ河畔のブリュールシュ・テラスを好んで散策し、この街の美しい風景を楽しんだという。1841年にはゴットフリート・ゼンパーの設計による宮廷歌劇場が開場し、夢のように美しいドレスデン旧市街の町並みが現出した。



(ドレスデン郊外を流れるエルベ川)



(カトリック聖母教会)



(騎士の行列)

ドレスデンの音楽の歴史は、1548年にザクセン選帝侯モリッツが発足させた宮廷楽団にはじまる。1530年に創立されたミュンヘンの宮廷楽団(現バイエルン州立管弦楽団)にはわずかに遅れをとったとはいえ、シュターツカペレ・ドレスデン(現、ザクセン州立シュターツカペレ・ドレスデン、日本ではドレスデン国立歌劇場管弦楽団という名称で知られている)は世界最古のオーケストラのひとつ。ゼンパー歌劇場の開場直後の1843年にはリヒャルト・ワーグナーが宮廷楽長に就任し(さまよえるオラ

ンド人)、『タンホイザー』を初演している。

シュターツカペレは毎夜のオペラ演奏で多忙をきわめているため、オーケストラ・コンサートが一般化し、需要が高まるにつれそれにこたえるのが困難な状況が生じてきた。そこで1870年にドレスデン第2のオーケストラとして創設されたのがドレスデン・フィルである。この年の11月29日に初の演奏会を開いている。当時の名称はドレスデン・ゲヴァントハウス・オーケストラというもので、これは1781年創立の世界最古の民間のオーケストラ、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団を思い起こさせる。

ベルリンやミュンヘンといったドイツの大都市では、宮廷歌劇場を起源とする歌劇場付属のオーケストラがもっとも古い歴史を有している。それに対し、主要なシンフォニー・オーケストラは19世紀後半の設立だ。ベルリン・フィル(1882)、ミュンヘン・フィル(1893)とともに、ドレスデン・フィルもその典型的な例といえるだろう。以後、ドレスデンではオペラのピットでの演奏を主な役目とす

るシュターツカペレとコンサート活動を専門に行なうドレスデン・フィルは共存共栄の形で発展を続けた。また、1915年にベルリンで行なわれたリヒャルト・シュトラウスの大作(アルプス交響曲)の初演では、ドレスデン・フィルとシュターツカペレ・ドレスデンの共同演奏でその膨大な編成をまかなうなど、両者の協力によって実現されたプロジェクトも少なくない。

ところが、1945年2月13日に連合国軍の空襲によつてエルベ河畔のフィレンツェと呼ばれたこの美しい都市

は反響に押し、ゼンパー歌劇場やドレスデン・フィルの演奏会場も破壊された。一晩で3万5千人が命を失ったこの攻撃は、戦路上まったく無意味なもので、広島への原爆投下としばしば比較される第2次大戦がもたらした最大の悲劇の一つである。ドレスデンの音楽界がこうなつた被害も甚大だった。しかし、ドイツ人にとって、音楽は食物と同様に不可欠のものであり、終戦後程なく演奏活動は再開される。

東ドイツ時代は社会主義体制下で制約は多かったものの、それによって古き良き時代のドイツのオーケストラの響きが今日に伝えられたことは注目し得る。ドレスデン・フィル、シュターツカペレの二つのオーケストラの響きには、良くも悪くもインターナショナル化され、洗練をきわめた旧西独のオーケストラが失ってすでに久しいものがある。

ドレスデンでは今、かつての街の象徴、聖母教会の再建工事が進められている。爆撃で破壊された建物の瓦礫から破片を集めて分類し、その形を一つ一つコン



(ツヴィンガー宮殿)

ピュータに入力して3次元のジグソー・パズルを組み立てる。まったく気が遠くなるような作業である。1994年に開始された工事は2006年に完了する予定だという。こうした古い町並みを守ろうとする市民の執念には我々の想像を絶するものがある。でも、この執念こそがドイツ音楽の伝統を守る心なのだ。現代的な精妙なアンサンブルが加味されるなどドレスデン・フィルの演奏にも変化の波は押し寄せてきているものの、その根幹となる部分は市民たちが守り続けたドレスデンの伝統的な町並みと同様にまったく変化することはないだろう。

今回の来日でタクトをとるワルター・ウェラーについても触れておこう。1939年にウィーンに生まれなので、彼の名は本来、ヴァルター・ヴェラーと発音する。ワルター・ウェラーは英語式の発音だ。こじつけのように思われるかもしれないが、この二つの語感の違いは、ドイツ音楽における英米の演奏家による演奏とドイツ・オーストリア人による演奏の違いにあい通じるものがあるような気がする。ごつごつとした印象のある、とり方によってはちょっと野暮ったいところ、それこそがドイツ・オーストリア人によるドイツ音楽演奏の特徴であり、そうした感覚に根ざしたアプローチによってドイツ音楽は真に生き生きとした生命が与えられるのだ。

1939年にウィーンに生まれたウェラーはバリリ弦楽

四重奏団で活躍したモラヴェッツにヴァイオリンを師事し、1956年にウィーン・フィルに入団、1961年にコンサート・マスターに就任した。日本の学校制度に当てはめるならば、高卒の年令でウィーン・フィルに入り、大卒の年令でコンサート・マスターということになる。こうした類い稀な能力の持ち主であるからこそ、指揮台の上から百人もの楽員を操り、自らの音楽を作ることができる指揮者に憧れるのだろう。ウェラーはカール・ベーム、ヨーゼフ・クリップス、ジョージ・セルといった今世紀を代表する巨匠に指導を仰ぎ、まだコンサートマスターに在籍中だった60年代後半にウィーン・フィルを指揮して指揮者デビューを飾った。71年にはデュイスブルクの歌劇場の音楽総監督に就任し、75年から78年まではウィーン・トーンクンストラ管弦楽団の芸術監督をつとめるなど、多忙な指揮活動に入った。オーケストラのすべてを知り尽くしたウェラーだけに、小細工を弄した作為的な音楽づくりとは無縁。常に正統的な解釈によって作品本来の味わいを尊重する。言葉でいうのはたやすいけれども、実際はオーソドックスな解釈によって聞き手に感動を与えるのはとても難しいこと。それが可能な数少ない名匠のひとりがウェラーではなかろうか。



〈ドレスデン郊外の別荘地〉



伝統の継承者同士の名コンビ ウェラーとドレスデン・フィル

文=諸石 幸生 (音楽評論家)

text by Sachio Moroishi

ワルター・ウェラー、なつかしい名前である。別掲のインタビューでも語られているように、前回の来日が15年以上も前になるというから、本当に久々の登場ということになる。1959年の初来日はカラヤン率いるウィーン・フィルのコンサートマスターとしてのそれであり、その後NHK交響楽団などへ指揮者として登場、私たちには比較的馴染み深い存在となった。さらにプロコフィエフの交響曲全集、バルトークのピアノ協奏曲集(ソリストは若き日のパスカル・ロジェであった)などのレコーディングを通して人気も評価も高めたウィーン生まれの名指揮者である。しかし、80年代半ばからは来日公演も録音活動も途絶えて、激変する音楽界の中でアツという間に2000年の声を聞くようになってしまったという訳である。

それだけに今回の来日公演は待望のものだが、このワルター・ウェラーは本当にウィーンの水で育ってきた生粋のウィーンっ子である。生まれは1939年11月30日ウィーンだが、まず父上のワルター・ウェラー氏が長年ウィーン・フィルの第1ヴァイオリン奏者として活躍してきた音楽家であったし、高名なヴァイオリンの教育者でもあったのだから、息子のワルターも将来はヴァイオリン奏者、それもウィーン・フィルのヴァイオリン奏者になることを半ば宿命づけられた環境にあったことが想像される。

6才からヴァイオリンを始めるが、ウィーン音楽アカデミーで名教師フランツ・ザモヒルのもとで研鑽を重ねたワルターは、14才の時からウィーン・フィルで演奏する



資格が与えられ、21才の若さでコンサートマスターに就任、ウィーンを代表する職となっている。またこの間の1958年からはウィーン・フィルの仲間たちとウェラー四重奏団を組織して室内楽にも精力的に取り組み、1959年に行われたミュンヘン国際コンクールでは第二位(1位はなし)に輝いている。そしてハイデン、モーツァルト、シューベルトなどの弦楽四重奏曲を数多く録音、そのしなやかで、温かく、しかも洗練されたテクニックを背景にした演奏で一世を風靡。1960年代半ばには「世界を代表する8大カルテットの一つ」と評価されるまでに至っている。即ち、ワルター・ウェラーの名はウィーンの若き世代を象徴する希望と憧れの音楽家として浸透し、事実、世界的人気を博していったのである。

しかしこうしたヴァイオリン奏者としての活躍の一方で、ウェラーは指揮にも強い関心をもつ音楽家であった。既に学生時代にカール・ベーム、ホルスト・シュタインのもとで指揮の研鑽を始めていたウェラーは、おそらくフルトヴェングラー(1954年に録音された名盤「ワルキューレ」にウェラーは参加している)、ワルター、クレンペラー、クナッパertzブッシュ、さらにカラヤンらの指揮のもとで知った指揮芸術の魔術的な魅力にますますとりつかれていったのであろう。ウィーン・フィルでの演奏経験を深めれば深めるほど指揮者への道を志す強い願望に襲われるようになってくる。

ヨーゼフ・クリップス、ジョージ・セルのもとでさらに指揮者としての素養を深め、デビューへの糸口をつかもうとしていたウェラーだが、1966年、突然、デビューの機会が訪れる。それは急病となった恩師ベームの代役という大仕事であり、作品もベートーヴェンの「田園」交響曲、シューベルトの交響曲第9番ハ長調という大作の組み合わせであった。ウェラーはその大役を暗躍で指揮、もちろん公演内容も大成功の内に終えている。しかもその2ヶ月後には、今度はヨーゼフ・クリップスの代役としての仕事が無駄な。今度はウィーン交響楽団との仕事で、曲はベートーヴェンの「英雄」交響曲、ブラームスの交響曲第1番であったが、ウェラーはこれも成功させて、指揮者ウェラーをウィーンの楽壇に印象づけたのだ。そして1969年には人もうらやむ名門



オーケストラのコンサートマスターの地位をなげうって、いよいよ指揮者ワルター・ウェラーとしての第二のキャリアを始めたのである。

ウィーンに生まれ、ウィーン・フィルのヴァイオリン奏者を父に持ち、自身もウィーン・フィルに入団、コンサートマスターに迎えられるというウィーン尽くしの名ヴァイオリン奏者がいよいよ指揮者としての活動を始めた訳だが、指揮者ウェラーのキャリアは最初、ウィーン・フォルクスオーパーやウィーン国立歌劇場などでのオペラ公演に注がれた(最初のオペラはウェラーの「アプ-

ルリン・シュターツオーパーで「イーゴリ公」、ミラノ・スカラ座で「さまよえるオランダ人」、イングリッシュ・ナショナル・オペラで「ナクソス島のアリアドネ」などを指揮、大きな成功を収めている


こうして現代指揮界に輝かしい足跡を重ねてきたウェラーだが、今や60代を迎えて円熟の境地に達している。しかも私たちは意外にもウィーンの血を引くこの世代の名指揮者を、現在、持ち得ていない。聞くところによればウェラーはクナッパertzブッシュやシューリヒトなどの往年の巨匠たちを何よりも敬愛し、ウィーンの伝統と味わいにも絶賛を惜しまない音楽家であるという。もちろん作品的にも、ウェラーはハイデンからブラームスに至るドイツ-オーストリアの音楽をもっとも得意とし、それらの再現に確信と情熱をもって取り組んできた実績を誇っている。

確かに20世紀後半の音楽界はレパートリー的にも激変、古典派の作品に対する見方も変わり、私たちのレパートリー的な視野も前後に大きく拡大されつつある。演奏、レパートリー面での新規開拓は大歓迎だが、その反面、私たちはいつしかベートーヴェン、シューベルト、ブラームスといったオーケストラ音楽のスタンダードをじっくりと味わい、楽しみ、その恩恵に浸る喜びを忘れがちになったようにも思われる。ウィーン生まれの円熟のマエストロ、ワルター・ウェラーが今度の来日公演で聴かせてくれるのは、こうしたオーソドックスなレパートリーの価値と魅力の再確認であり、その素晴らしさを噛みしめる絶好の機会になるものと期待されてならない。

しかも今日の来日公演は、ドイツの名門ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団を率いての公演である。パウル・ヴァン・ケンペン、ハインツ・ボンガルツ、クルト・マスアといったドイツの名指揮者たちによって鍛え上げられてきたこのオーケストラは、ドレスデンのもう一つの名門、ドレスデン・シュターツカペレとともにドイツ・オーケストラ界を象徴する存在である。

指揮者、オーケストラ、そのいずれもが伝統の重みと味わいを熟知した演奏家たちである。そんな彼らがウィーンゆかりの名作を聴かせてくれる。我を忘れて聴き入り、陶酔的興奮に浸る一夜になるものと期待されてならない。

ハッサン」であったという)。ウィーンにおける彼の名声は高まる一方で、数々のコンサート指揮も要請されるようになる。それはすぐに国外へも浸透していく。そしてロイヤル・リヴァプール・フィル、ロンドンのロイヤル・フィル、グラスゴウのロイヤル・スコティッシュ管弦楽団の首席指揮者や音楽監督などイギリスを舞台に繰り広げられるようになる。さらに、レコーディング活動も活発になり、ウェラーはラフマニノフ、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ他を録音、カタログを賑わせた。1980年代末からは再びその手腕がオペラでも発揮されるようになり、ベ



Program Note

文=長谷川勝英(音楽評論家)
text by Katsuhide Hasegawa

ベートーヴェン:交響曲 第5番 ハ短調 op.67「運命」 Beethoven: Symphony No.5 in c minor op.67

現在も緑豊かで落ち着いた、美しい景色が広がる、ウィーンの北部に位置するハイリゲンシュタット。この付近にはルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が住んだいくつかの家やその散歩道が残されていますが、それらの中で1802年に二人の弟宛てに『ハイリゲンシュタットの遺書』を書いた家はとりわけ有名になっています。ベートーヴェンはこの『遺書』を境に充実した創作活動期に入りました。1803年の夏から翌年の春にかけて第3番「英雄」を書き上げ、独自の交響曲の世界を切り開いたベートーヴェンは、早くも第5番の構想を練り始めましたが、作曲が完了したのは4年後でした。そして1808年12月22日、ウィーンのアン・デア・ウィーン劇場で作曲者自身の指揮により、第6番「田園」とともに初演されました。

作品は序奏なしにクラリネットと弦楽器が4つの音から出来た動機をフォルティッシモで決然と奏して始まります。のちに「運命」というニックネームが付けられるもととなったこの動機のリズムは、作品全体にわたって重要な役割を果たしています。なお第3楽章と第4楽章は続けて演奏されます。

- 第1楽章：アレグロ・コン・ブリオ、ハ短調、4分の2拍子、ソナタ形式。
- 第2楽章：アンダンテ・コン・モト、変イ長調、8分の3拍子、自由な変奏曲形式。
- 第3楽章：アレグロ、ハ短調、4分の3拍子、スケルツォ。
- 第4楽章：アレグロ、ハ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。

Beethoven

ベートーヴェン:交響曲 第6番 ヘ長調 op.68「田園」 Beethoven: Symphony No.6 in F major op.68 "Pastorale"

1807年に本格的にスケッチが始められ、第5番と相前後して完成された第6番で、ベートーヴェンはこよなく愛したハイリゲンシュタットの美しく豊かな自然を歌い上げています。作曲者が「描写よりはむしろ感情の表現」と語っているように、「田園」は単なる描写音楽ではなく、その範疇を越える、自然に対する讃美と感謝の気持ちにあふれています。ハイリゲンシュタット駅からハイリゲンシュテッター通りに出て右に進み、しばらくして交差点を左に曲がりグリニンツィンガー通りを900メートルほど進むと左側に、劇作家・詩人のフランツ・グリルパルツァーが母親と住んでいた家があります。ベートーヴェンは1808年の夏、彼らとともにここに住み、第6番「田園」を作曲したと伝えられています。

人生の厳しさが強烈な力感をもって描いた「運命」と、大自然を高らかに讃美した「田園」という、まったく趣を異にする2つの交響曲は、ほぼ同じ時期に並行して作曲され、そして同じ日に初演されたのです。5楽章という当時の交響曲としては珍しい構成をとり、それぞれの楽章には標題が付けられています。なお第3楽章以降は続けて演奏されます。

- 第1楽章：アレグロ・マ・ノン・トロポ、ヘ長調、4分の2拍子、ソナタ形式。「田園に着いた時の愉快的気分の目覚め」。
- 第2楽章：アンダンテ・モルト・モッソ、変ロ長調、8分の12拍子、ソナタ形式。「小川のほとりの情景」。
- 第3楽章：アレグロ、ヘ長調、4分の3拍子、自由な3部形式、スケルツォ。「田舎の人々の楽しい集い」。
- 第4楽章：アレグロ、ヘ短調、4分の4拍子。「雷雨、嵐」。
- 第5楽章：アレグレット、ヘ長調、8分の6拍子、ロンド形式。「牧歌、嵐のあとの喜びと感謝」。

ブラームス:交響曲 第1番 ハ短調 op.68 Brahms: Symphony No.1 in c minor op.68

ヨハネス・ブラームス(1833-1897)は4曲の交響曲を書いています。第1番を発表したのは40歳を過ぎてからのことです。作曲が始められたのは1855年の夏ということですが、完成まで20年を超える歳月が費やされました。1873年に「ハイドンの主題による変奏曲」を作曲し、オーケストラ書法に次第に自信をつけていったブラームスはその翌年あたりから交響曲第1番の作曲に本腰を入れ始めました。初演は1876年11月4日、カールスルーエでフェリックス・オットー・デッソフの指揮で行なわれ、成功を収めました。ハンス・フォン・ビューローはこの作品を「ベートーヴェンの9曲の交響曲に続く作品」という意味で「第10」と評しましたが、これは常にベートーヴェンを念頭に書き続けてきたブラームスにとっては我が意を得たりの賛辞であったに違いありません。北ドイツ、ハンブルク生まれのブラームスらしく深い響きをたたえた、構成のしっかりした堂々たる作品です。

- 第1楽章：ウン・ポーコ・ソステヌート、ハ短調、8分の6拍子(序奏)～アレグロ、ハ短調、8分の6拍子(主部)、序奏の付いたソナタ形式。
- 第2楽章：アンダンテ・ソステヌート、ホ長調、4分の3拍子、3部形式。
- 第3楽章：ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ、変イ長調、4分の2拍子、3部形式。
- 第4楽章：アダージョ、ハ短調、4分の4拍子、ピウ・アンダンテ、ハ長調、4分の4拍子(序奏)～アレグロ・ノン・トロポ、マ・コン・プリオ、ハ長調、4分の4拍子(主部)、序奏の付いた展開部のないソナタ形式。

Brahms

Schubert

シューベルト：交響曲 第7番(8番) 短調 D.759「未完成」

Schubert: Symphony No.7 (8) in b minor D.759 "Unfinished"

600曲を超える歌曲を作曲したフランツ・シューベルト(1797-1828)はまた、オーケストラ曲、室内楽曲、それにピアノ曲などの器楽曲にも数多くの作品を書いています。これらの中でオーケストラ曲の中心を成すのは交響曲で、作曲に着手した作品数は13を数えますが、番号が付けられた作品は完成した7曲と、未完成に終わった「未完成」の8曲ということになります。およそ15年間という短いシューベルトの創作期を3つの時期に分けるとすると、「未完成」は1819年から23年までの「中期」に属します。1822年10月にウィーンで書き始められましたが、オーケストラ譜になったのは第1、2楽章だけで、第3楽章はスケッチ(9小節だけがオーケストラ譜として残された)だけ、また第4楽章はまったく手がつけられませんでした。未完成となった理由はいろいろ考えられていますが、いずれも推測の域を出ていません。初演されたのは作曲者が世を去って35年がたった1865年12月17日にウィーンにおいてでした。

2楽章の作品ではあっても、この中に古典派の形式とロマン派の精神を見事に調和させた名作で、これだけで完結した作品と言ってよい、シューベルトの器楽曲の中でもっとも広く親しまれている作品です。

- 第1楽章：アレグロ・モデラート、短調、4分の3拍子、ソナタ形式。
- 第2楽章：アンダンテ・コン・モト、長調、8分の3拍子、ソナタ形式。

ウェーバー：歌劇「オベロン」序曲

Webert: "Oberon" Overture

カール・マリア・フォン・ウェーバー(1786-1826)が着手したオペラは楽譜消失・未完の作品を含めて11あります。この中で1821年にベルリンの宮廷劇場で初演された「魔弾の射手」はドイツ・ロマン派オペラの祖としてとりわけ有名になっています。「オベロン」(全3幕)はそれから5年経った1826年4月12日にロンドンのコヴェント・ガーデン劇場で初演された、ウェーバー最後のオペラです。体調を崩していたにもかかわらず、経済的に厳しい状況にあったウェーバーはこの劇場からの依頼を受けました。自ら指揮をとった初演は大成功を収めました。無理がたたると、6月5日にこの異郷の地で亡くなりました。

歌劇「オベロン」は9世紀初めのフランスやバグダッドなどを舞台に繰り広げられる、妖精の国の王オベロン、その妻ティタニアをめぐる物語です。序曲は妖精の国を象徴するホルンの序奏によって開始され、第2幕第3場でバグダッドの太守の娘レツィアが歌うアリア「大洋よ、汝巨大なる怪物よ」など、歌劇の中の音楽によって構成されています。

Weber



Walter Weller

Dresdner Philharmonie



ワルター・ウェラー インタビュー

1999年10月1日
 記者: 山井秀徳 (朝日放送 シンフォニーホール事務局)

1999年秋——ドイツの美しい古都ドレスデンの文化宮最大ホールに、指揮者ワルター・ウェラー氏を訪ねました。ウェラー氏はドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団が創立130周年を迎える2000年、オーケストラを率いて日本にやってきました。来日を前に、ジャパン・ツアーへの抱負と、これまでの活動について語っていただきました。



——ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は2000年に創立130周年を迎える歴史あるオーケストラですが、ウェラーさんが、このオーケストラと一番最初に出会ったのはいつですか？

ウェラー氏(以下W/と省略): 1997年にこの素晴らしい楽団を指揮する機会を得ました。ポーランドのワルシャワ公演です。それ以後、定期的に客演し、非常に良い関係を築いてきています。昨年(1998年)はトルコに演奏旅行を行いました。今シーズンにはシリーズで3回指揮する予定です。また、3週間後に、オーストリア、オランダ、フランス、ドイツへ演奏旅行を行います。

——ドレスデン・フィルハーモニーの特徴について教えてください。

W/: ご存知のように、私はオーケストラの団員でした。非常に若い時期にウィーン・フィルの団員となり、長年演奏してきました。指揮者として、このドレスデン・フィルから受ける私の印象は、ウィーン・フィルと非常に似ているということです。2つのオーケストラは良い意味での競争相手です。どちらかが、勝つか負けるとかそういう意味ではなく、友愛的な関係とでもいうのでしょうか。ドレスデン、ウィーン、ベルリンといった音楽の都と呼ばれる都市では、世界的に著名な指揮者達が、同じ音楽学校出身者から成る楽団で、様々な作曲家の作品を、同時期同じようなスタイルで指揮する歴史がありました。また同じドイツ語圏という共通の言語を持っているので、これらの街の伝統あるオーケストラは共通している部分が多くなるような気がします。



ワルター・ウェラー
 (指揮者)
 ヴァイオリニストとして1971年、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の団員。21歳にしてコンサートマスターとなり指揮、現在、指揮者としてヨーロッパで活躍している。

——先ほどウィーン・フィルのお話が出ましたが、多くの日本のファンの方々は、ウェラーさんがウィーン・フィルのコンサートマスターであり、ウェラー・クナルテットを率いて活躍していらっしゃったこと、多くのCD録音を出されたことなどを良く知っています。その当時のお話を聞かせてください。また、今でもヴァイオリンを弾かれますか？

W/: 現在、ヴァイオリンは私個人、自分のためだけに弾きます。我が家の中だけで、公式の場では一切弾きません。それには理由があります。ウィーン・フィルのコンサートマスターだった当時は、1日のうち10時間くらいはヴァイオリンの練習をしていました。今はあれだけの時間を持てません。私の耳には自分がヴァイオリニストとして役目を担った全盛期のレベルの音というのが、今なお残っています。あのレベルに及ばない以上、公式の場で弾く事は出来ません。

ヴァイオリンを学び始めたのは6才でした。まず、父から手ほどきを受け一年ほど学びました。私の父はヴァイオリンの教師で、当時、リヒャルト・シュトラウスの孫にもヴァイオリンを教えていました。シュトラウスは6才の私と7才の孫のために「バラの騎士」の最終楽章のデュエットを、私達向けに簡単に演奏出来るよう編曲してくれ、その楽譜に「ばらの騎士リヒャルト・シュトラウス」とわざわざサインを入れてくれました。この楽譜は今でも我が家に大切に保管しています。

その後、音楽学校で学びました。13才の時、ウィーン・フィルのリハーサル・エキストラ奏者の募集がありました。ウィーン・フィルは今でも150名という大所帯ですが、当時は118名でした。学校を休んでそのオーディションを受けに行き、合格しました。そして14才半でウィーン・フィルで演奏を始めたのですが、その最初の演奏はフルトヴェングラー指揮「ワルキューレ」の第1楽章のレコード録音

でした。17才で本団員となり、21才でコンサートマスターになりました。当時、フルトヴェングラー、ブルーノ・ワルター、クレメンラー、クライバー、ミトロプーロス、カラヤン、ベーム、クナッパーツブッシュなど時代の超一流指揮者達の黄金時代で、彼らと同世代を共に歩むことが出来たという事が、私の人生にとってかけがえのない素晴らしい体験でした。

——ドレスデン・フィル以外の演奏活動についてお話しいただけますか。

W/: 一番多く客演しているのは北欧です。ストックホルム、イエテボリ、ヘルシンキなどに客演しています。昨日イエテボリからやって来たのですが、このオーケストラとグラモフォンとの録音契約があり、それで今、録音を行っているところです。イエテボリのオーケストラはあまり海外旅行をしないのでそれほど有名ではありませんが、その代わり数多くの録音があり、ヨーロッパ屈指のオーケストラです。

またマドリッドのスペイン国立管弦楽団の音楽監督として17年間活動しています。またロイヤル・スコティッシュ管弦楽団には首席客演指揮者として在籍したあと、現在名誉指揮者というポストをいただいています。大きな責務を負っていますね。そのほか、ロイヤル・リヴァプール・フィル、ロンドン交響楽団、ロンドン・フィル、トゥールーズ管弦楽団、ミラノ・スカラ座にも客演しています。世界中至る所に客演しているとも言えますね。

——今回ドレスデン・フィルとの日本公演では主にドイツの作曲家の作品を演奏されますね。

W/: これまでに、私はベートーヴェンの作品を数多く指揮しています。1988年にはロンドンでベートーヴェンの交響曲第10番を世界初演しました。これはウィーン、ボン、ベルリン、それぞれ国立図書館など別個に所蔵されていた草案が発見され、それをまとめて第1楽章を作曲し直したものです。そうですね。ベ-

ートーヴェンの全曲演奏は年に2~3回指揮していますし、ヨーロッパでは私はベートーヴェン指揮者として知られています。今日のプログラムはベートーヴェン以外にもドイツ、オーストリアの作曲家の作品がありますし、私も大好きな作品が並びますので、喜んで指揮したいと思っています。

——バーミンガムのオーケストラとのベートーヴェンの全曲録音は日本でもよく知られていますかドレスデン・フィルとの違い、あるいは各オーケストラとの違いを教えてください。



Walter Weller

W/: このような質問をよく受けます。オーケストラにはそれぞれ独自のサインというものがああります。このサインを上手くキャッチして良い部分を生かしながら関係を築くわけですが、しかし、私にも指揮者として作品についての考えがあります。リハーサルで私の考えを表現し指示しながら、オーケストラとともに作品を作り上げていきます。私が指揮するとき、どんなオーケストラであっても私が確信していることを貫いていきます。

作品の作曲家により密接に関わった伝統のあるオーケストラは私の指示をより早く理解するでしょうし、そうでないオーケストラでは幾分その理解に時間がかかるという違いはオーケストラによってあるかも知れません。指揮者がどのような感性を持っているかということは演奏に決定的な影響を与えます。一概

に違いといいますが、それは個性の違いというのでしょうか。人間性が同じではないように、オーケストラもそれぞれが違っています。ウィーンやドレスデンに比べてたとえば私の振るイギリスの管楽器は線が細いといえます。その点をその奏者に言えば、把握していきます。

——ドレスデン・フィルには独特の味わいがありますね。

W/: ドレスデンとウィーン。この2つの街は世界の中でも他に類をみない今も世代を超えて伝統が引き継がれているところです。これは弦の奏法にも言えることですが、教師から生徒へと脈々と受け継がれていきます。演奏者はオーケストラに入団前にすでにその素地が出来ていて、入団後、ベテラン団員から後輩へとその奏法の伝授がなされるのです。こうした奏法が独特の響きを生み出すのです。ですからドレスデン・フィルは本当に素晴らしい響きを持っているのです。

——日本の聴衆の皆さんにメッセージをお願いします。

W/: もうずいぶん日本を訪れていませんが、このたび機会に恵まれたことを非常に嬉しく思っています。

これまで何度か日本を訪問するチャンスはあったのですが、スケジュールが合わず、実現できませんでした。日本を初めて訪れたのは1959年ウィーン・フィルの世界ツアーです。指揮者はカラヤンでした。その後何度か日本を訪れましたが、この15年ほどは行っていません。日本の聴衆の皆さんがとても熱心だったということ、どれくらい準備してどのように反応してくれたか、よく覚えています。私が訪問しない間に日本の質の高い聴衆については、世界的にもよく知られるようになりました。ですから本当に楽しみにしています。この素晴らしい響きのオーケストラと一緒に訪れること、この楽団がウィーン・フィル同様にもつづけている伝統を日本に持っていきけることを嬉しく思っています。





時
で
さ
え
流
し
去
れ
な
い
、
夢
。
マ
イ
セ
ン



Meissen

マイセン 日本総代理店
GK リーケー・ジャパン・エージェンシー株式会社

本社
〒600-8445 京都市下京区新町通高辻上ル434-2
TEL 075-341-6868 FAX 075-341-7177

東京支店
〒160-0004 東京都新宿区四谷2丁目4番1号ルネ西谷ビル7F,8F
TEL 03-3356-6868 FAX 03-3356-6671

マイセン倶楽部日本事務局 フリーダイヤル 0120-380-336



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie

コンタクトレンズなのに
遠近両用？



できたんだ。



メニコンから
遠近両用コンタクトレンズ「メニフォーカル」
ハードとソフト同時新発売。

遠近両用コンタクトレンズ
メニフォーカル

高い酸素透過性とすぐれた乱視矯正力
ハード **メニフォーカル Z**
医療用承認番号 211008ZZ00774

つけ心地やさしい含水率72%素材
ソフト **メニフォーカル S**
医療用承認番号 205008ZZ01093

メニフォーカル お客様センター

あなたとメニフォーカルをむすぶホットステーション


製品、取扱店についてのお問い合わせは…

詳しい資料のご請求は…


メニフォーカルのすべてがわかる…

TEL.03-5214-3103
(9:00~18:00 土日も受付)

☎ 0120-217-103
(24時間自動音声受付)

 www.menifocal.com

お願い:コンタクトレンズは医療用具、必ず眼科医の処方を受けてお求めください。●着用時間をお守りください。●取扱方法を守り、正しくご使用ください。●提示された定期検査は必ずお受けください。●少しでも異常を感じたら直ちに眼科医の検査をお受けください。
メニフォーカルZの連続装用は眼科医の指示によりお始めください。 ※連続装用の承諾書と管理手帳の内容をお守りください。なお、涙の量、アレルギー体質などが原因で、連続装用できない方もあります。

 株式会社 **メニコン**
〒460-0006 名古屋市中区葵三丁目21番19号

東ヒガシマル



●旬菜のハーブピクルス



うすくち彩々



●海老しんじょと冬瓜の炊き合わせ



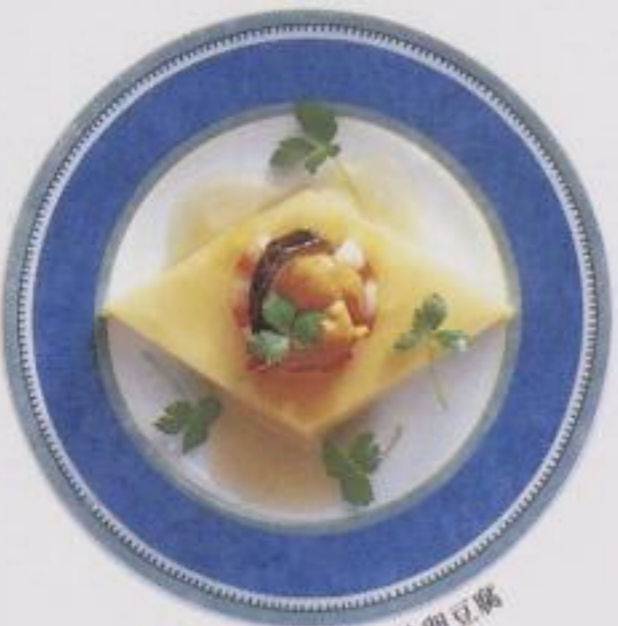
●貝と小鯛の手まりずし



●冷やし小鉢そうめん



●山いもの三色団子



●ぜいたく卵豆腐

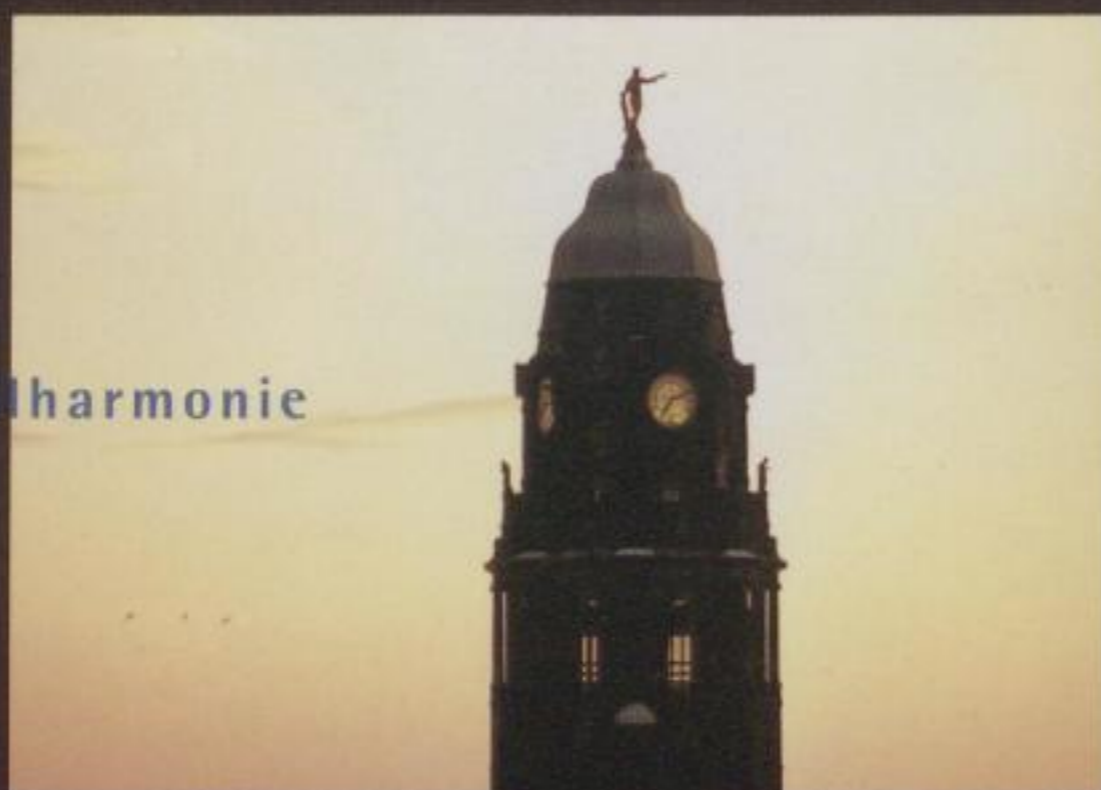


料理は舌で味わい、目で楽しむもの。
仕上りのきれいな味づくりに
うすくちしょうゆは欠かせません。
伝統製法で丹念に熟成醸造した
ヒガシマルのうすくちは、
色の濃さがこいくちしょうゆの
ほぼ3分の1(当社比)。
風味、香りもまろやかで
クセがなく、素材の色や持ち味を
くつきりと引き立てます。
和食はもちろん、
洋風料理やサラダにも：
いろいろおいしく、美しく
四季の食卓に味わいの華を咲かせます。

ヒガシマル醤油株式会社

本社 〒679-4193 兵庫県龍野市龍野町富永100-3 TEL (0791) 63-4567 大阪支店 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-5-3 TEL (06) 6441-2575 東京支店 〒104-0033 東京都中央区新川1-2-14 TEL (03) 3551-0198

Dresdner Philharmonie



- ◎ 招聘・企画・制作・編集 / 朝日放送(株) シンフォニーホール事業局
- ◎ デザイン / (株) ブラウニー
- ◎ 写真 / 飯島隆 ほか




The Symphony Hall
ABC